7

「革谿医砭」（一八五四）にみる平野重誠の医療観

中村節子[1]・平尾真知子[2]
[1]看護史研究会
[2]東京慈恵会医科大学

江戸時代後期に『病家須知』を著した町医者、平野重誠（一七九〇～一八六七）の家系的な背景については、第一〇五回医史学会で報告したが、今回は著書『革谿医砭』をもとに、現代においても学ぶことが多いと思われる彼の医療観を分析したので報告する。

研究方法として、『革谿医砭』から彼の医療観が表現されている文章を選別、分析し考察する。本書は安西安周がすでに『平野革谿の事蹟』のなかで紹介、概説しているが、医療観に注目した研究は行われていない。

『革谿医砭』は和綴本で縦二十五センチ、横十八センチ、序文を入れて二十一頁からなり、嘉永六年（一八五四）に発刊されている。

彼の著書は約二十数冊あるが、彼の著作においては中期の作品である。革谿とは彼の号である。医砭の砭とはいしばり、すなわち治療用の石製の針のことであるが、「いましめる」「いましめ」の意味がある。この本が書かれた一八五四年は、ペリーが浦賀に来航、日米和親条約が結ばれた年で、年号も嘉永から安政と改元された。世相も揺れ動き、医療もその影響を受けていたようである。初期の著作である『病家須知』（一八三二）の序文に「まさに太平の世が二百余年も続いた結果、世の中は軽佻浮靡に流れ、それは私の技とする医術の世界にまで及んでいる。医者は競って名利に走り、いち早くよい役職に就こうとする。その技術の未熟さ、恥を知らない厚顔さ等々、医学の衰退を示す事例に事欠かない」さらに『革谿医砭』の中にも「今の世の医士は多くは傭瀬惰弱の輩か孤独多病の者か、破家流民の徒か、相工苾蒻の党か、又は士人にならんとするには禄分もあらず、商売にならんと思えども、資本もなければ、止むことを得ず。唯生涯の飢渇を、此業に免んが為に、医となりし類のみ多ければ、（以下略）」

と医学の衰退を嘆く言葉が述べられていることから、医師の倫理が低下した時代が続いていたことが解る。

『革谿医砭』において彼の医療観が表現されている文章として次のことがあげられる。

まず、冒頭において「天地の間に人の生命ほど至って重く、且貴きはなし。医は其至重至貴の生命を害する疾を治することを司る職なれば、小技なりと雖も、その関係する所、これより大なるはなし。殊に王侯貴人に至っては、一人の身を以て、国家の盛衰にも繋がることなるに、其病ある時に当ては、死生の権、全く医士一人の手に在ることなれば、莫大の大任にして、他の技芸の比すべきに非るは因なり。されば医たる者は、風夜に勉強して深く心を潜め、切に思いを凝らして研究せずんばあるべからず、其の之を学ぶの要は、独りを慎み私心を去って、自ら欺くことなく内外一貫、言行一致の境界に到るに在り。」と述べ、つぎに、医技については刻苦陶練しなければ修得が難しいと説き、さらに「病人ありとは其病苦は擺撥して、先其病者の位禄貧富を思う意を生ずるなり。我ありとは自己の名聞利欲を先にして、後に病者に臨むをいうなり。実に此心を一掃せねば、実際の療治は決してならぬことなり。其実際の療治というは此の徳本の言の如く、唯一途に私の心を去て、人の病苦を吾身に拘摂して他を顧ず、見れて知易く弁易き者に応じて、事を処するまでのことなり。是を以て吾医の道を修める要は、唯務めて此私心を去の外にはあるべからずとは言えるなり」と述べている。

『革谿医砭』の中にみられる彼の医療観として、一、人の命は尊く重いものである。二、医は重大な大任をもっている。三、勉強や研究が必要である。四、私心をもたないこと。五、言行一致・内外一致。六、医技はつねに訓練が必要である、七、病治は人の病苦をわが身に引き受けて行うこと、があげられる。

これらのことから今日の患者中心の医療や医療者のあるべき資質を学ぶことができる。